「それでも僕は」

2019年、クスノキ、彩色
89・0チセン×42・0チセン×51・0チセン
作家蔵　（撮影＝荒関修）

丸尾康弘（1956年～）

右胸とおなかに手を当てて少し首をかしげた男の子。少し開いた口からは牙が飛び出ており、空洞になっている口の中の暗闇が牙の存在を一層際立たせます。

金箔（きんぱく）が施された目はつやつやと光をたたえていますが、その瞳はどこを見ているのか、うつろな様子です。左胸の下には穴が開いており、近づいてみると男の子の体の中が空洞になっていることがわかります。この穴は、作品の素材となっている木材の「うろ」をそのまま生かしたものですが、男の子がその内面に負った傷のように感じられます。

不安定な世の中に翻弄（ほんろう）され、将来の展望すら見えずに不安にさらされ不気味さをまとってしまった、か弱い男の子。それでも彼は、自分の手で自分を守りながら、自らの牙をもって道を切り開こうとしているのかもしれません。

（池田）

〈名画の扉〉　大川美術館企画展から